

# 珠姫のペンダ

牧野寺ケンタ



art: まきしむ

前回までのあらすじ

重傷を負った碓<sup>いかりざだ</sup>、真美<sup>まみ</sup>を始末しようとするチーム・クラリオン。おれ、山形<sup>やまがたけいし</sup>圭吾<sup>けいご</sup>は阻止しようとして彼らと揉め、その隙にオレンジに寄生された碓の「精神占領<sup>マインド・ジャック</sup>」で二名の仲間を失い、しかも碓の姿は忽然と消えてしまう。

しかし、悲嘆に暮れる暇はない。おれたちの密会場所であったラブホテルに、無数のオレンジが攻め込んで来たのだ。一時手を組んだおれたちは手傷を負いながらも何とかヤツらを撃退する。しかし窓の外には、これまで以上の「絶望<sup>ぜつぼう</sup>」がその全貌を露にしていた。地球を不穏分子と見なした掃除屋<sup>スイーパー</sup>と呼ばれる宇宙警察が「巨人<sup>じゆうじん</sup>」を召喚し、手始めにオレンジの乗った母船に攻撃を開始したのだ。この光景に平静を失った射手<sup>いてや</sup>谷麻弓<sup>まゆみ</sup>はクラリオンの仲間共々、巨人への特攻を取行すが、悲壮な覚悟も空しく巨人の放つ光線<sup>こうせん</sup>が全てを灰燼<sup>かいじん</sup>に帰す。

おれは月野真琴<sup>つきのまこと</sup>とその場から必死で逃げ、月野の住む幽霊アパートでインプラント痕<sup>あと</sup>を使った奇妙なSEXをするが……その直後に別人のようになった碓<sup>いかりざだ</sup>が現れ、先手を取られたおれは窓を突き破り——親友との死闘の幕が開く。

## Part VII デス・トランス

1

「へえ、碓<sup>いかりざだ</sup>って音楽とかあんま聴かないんだな」

「うん、かなり疎いよ」

「にしても、Bzもミスタルも聴いたことないヤツって珍しいよ」

「……そうかな？」

放課後。いつもの帰り道。

自転車を引きながらの、おれと碓の何気ない会話。

季節は秋も深くなってきた——。

肌寒い空気の彼方では、夕焼けが青春の魔法をかけ、二人の影法師を長く伸ばしていた。

「まあ、おれもどっちも聴かないけどね」

「じゃあ、山形はどんなの聴くの？」

「おれ？ まあ、パンクが好きだな。洋楽ならピストルズとかクラッシュとか、最近のならグリーン・デイだな。邦楽ならスターリンとか、初期の筋少も好きだ。最近はゴイステもよく聴いてる」

得意のジャンルで意気揚々とまくしたてると、碓は眉間を指で揉んで初めて遭遇した謎の言語に苦しむみたいに難しい顔になった。

「ナニガナニやらサツパリだ……」

「へへへ。おれがいつも碓の宇宙人蘊蓄をどんな気持ちで聴いてるか、少しは分かったか？」

意地悪く言うおれに、碓は苦笑いで返した。

「そうだ。今ちようどプレイヤー持つてるんだ。聴かせてやるよ」

「え、いいよ」

「いいからいいから。ゴイステの『さくらの唄』だ。名盤だぞお」

最初は、嫌々ながらもイヤホンを耳に嵌めた碓。

聴き始めてすぐは「こんなのやかましいだけだよ」なんてぼやいた彼だが、曲が進むに連れて表情が変わってきた。

そして――。

「これ、いいね」

「だろ？ 何か、沁みるだろ」

「うん。うん。すごくいいよ」

碓はその後、何度も「いいね」「いいよ」と繰り返し、身体で軽くリズムを取り出した。おれはそんな彼の反応が無性に嬉しくて、プレイヤーごと彼に渡して、それきりになっていた――。

ベイビー・ベイビー

ベイビー・ベイビー

君を抱き締めていたい

何もかもが

輝いて

手を振って

遠くで、『ベイビー・ベイビー』のサビが聴こえる。

それは実際に遠くからなのか、それともおれの耳が幻聴を拾ってしまっているのかは定かではない。

鼻には、血の匂い。

それと、草と土の香り。

血の鉄臭さはおれ自身から流れ出たもので、雑草と土の青臭く湿った匂いはおれの転がる真横や身体を預ける真下から発せられていた。

えっと、ナニがどうなった？

碓の攻撃を受けたのだ。

それで窓を突き破って、あのポロアパートの二階から、落ちた。

大丈夫なのかおれは。骨は、無事か？

手足の動作を確認しようとのろのろ起き上がるのと、ガサツと大きめの音を立てて、目の前に彼が降り立つのはほぼ同時だった。

「い、かり」

自分でもビックリするくらい、しわがれた声が出た。

口の中がカラカラに渴いている。

手足は自由に動くが、速度はひどく遅い。

ナマケモノになった気分では何とか両手を挙げるが、その一瞬後には碓の攻撃に弾かれてしまった。

またも刹那の速さで距離が縮められたらしい。

返す刀で繰り出された頭部への攻撃によってまたも草地に突っ伏す。

裸の上半身に、雑草と土の感触がダイレクトに伝わってくる。

先程から「攻撃」と表しているのは、おれの目が碓の動きを追いきれないためだ。

殴られているのか蹴られているのかも、定かではない。

それほど彼は俊敏に動き、+おれのダメージも深刻だった。

「ぐううっ」

情けない呻きが口から零れ、世界が歪むような痛みに苛まれる。

目の前には、碓の足。汚れたスポーツシューズが不気味に振りかぶられる。

「待て、いか」

当然の如く最後までは言わせて貰えず、腹部を強烈に蹴り上げられてかなりの距離を、飛んだ。

「ぐべえっ」

潰れたヒキガエルのようなみつもまない声。

次いで三度目の地面を舐める。

「いか、り、待て。おれ、だ。山形……」

自分でも驚いたことに、おれは防御すらままならないこの状態で、碓の説得を試みようとしているらしかった。

よろめきつつも何とか起き上がる。

双眸を見開き、改めて、彼を見た。

間違いない、そこにいたのは碓貞美だった。

しかし、以前のような美しさの中の純朴さは微塵も無く、冷徹で残酷なナイフの冷たさを秘めた瞳を緑に輝かせ、おれではなくその後ろを見るような親しみの無い視線を投げかけていた。

「碓……」

「圭くんっ!!」

突如響いた黄色い声に、おれは我に返った。

「月野」

そう言ったのはおれではなく、なんと碓だった。

「ちよっと見ない間に随分強くなったじゃないの。碓くん」

月野はおれたちを見下ろす形で、自分の部屋の割れた窓ガラスの淵に片足を掛けて立っていた。その顔はいつものようにどこか余裕の笑みを湛えている。

一方、上から目線の台詞を投げかけられた碓はというと、微笑を浮かべたままぼんやりと月野の方を見ている。

以前の近寄り難さなど微塵も感じさせない緩みきった表情。

そんな碓の身体には異変が生じていた。

それは男なら、誰にでも生じる生理反応だったが、今のこの



場には余りにもそぐわなかった。

碓は男性自身を「勃起」させていた。

へらへらと笑いながらアソコを勃起で、それを隠そうともしないのだ。

それは彼の月野への恋慕が最悪にストレートな形で露出したものなのだろう。

その恋情は月野へは届かない。だが、おれの中にあつた碓への未練を断ち切るには充分な威力があつた。

もはや碓は、彼であつて彼ではないのだ。

「うああああああっ！」

おれは咆哮を上げて碓へ突つ掛けた。

距離を詰める一瞬で、「感覚の渦」を呼び覚ます。

打撃は不利と見て喰らいつくような胴へのタックル。

碓の身体はあつけないほど容易く倒れた。

おれは四度目となる湿つた草の感触を確かめつつ、拳を振り上げる。

次の瞬間。

おれは宙を舞っていた。

状況をまったく理解できず、とにかく碓の位置を確かめる。

彼は「そこ」に居た。

さつきと同じ場所に寝転がっていた。

まだその顔には笑みが浮かんでいる。

緑の双眸が半月を形作っている。

ただ、ナニカが違つていた。

同じに見えるが、「姿勢」がチガウ。

碓は全身を反らせるようにブリッジをしていた。

おれはたつた一回の「揺れ」に弾き飛ばされたのである。

なんて暴れ馬だ。

そんな愚痴は声になる前に掻き消え、おれはとにかく無事に着地することに専念した。

しかし——腹に鈍い痛みを感じ、世界の上下が狂い、気がつくとおれは五度目の地面を喰らつていた。

信じられないことに、碓はあの姿勢からでも打撃を放てるらしい。

しかも充分に体重の乗つた一撃を。

もう一つ信じられないことだが、どうやらおれは以前の身体能力を失っているらしいことが分かつてきた。

「感覚の渦」は、未だ眠りに着いたままなのだ。

## 2

草むらの中にうずくまりながら、おれの頭の中で「オカシイ」という単語が明滅していた。

まず、明らかに動きが鈍い。

そしてラブホの時のようなどんどん増してくる高揚感がない。

抑えきれない暴力への欲求も同じく、ない。

頭もどこか漠然としていて、自分が今かなりのピンチだと  
うのに危機感が沸いて来ない。

まるで、裏山時代に戻ったみたいだ。

いや、全身を包む妙な気だるさもあるから、あの頃より酷い。

最低のコンディションである。

原因はなんだろう？

碇の最初の攻撃が想像以上のダメージになっているの  
だろうか？

いや、違うな。

決定的に思い当たることは、一つ。

月野との……あの行為だ。

あの「擬似SEX」とでも言うべき奇怪なエクスタシーを体  
験してから、この状態に至るまでの期間が短すぎる。

「つき、の。おれ、どうな……つでえ!？」

うずくまるおれの服が乱暴に引つ掴まれて、そのまま強引に  
投げ捨てられる。

受身も取れないまま柔らかさだけが取り得の地面に半ば埋ま  
る勢いで叩きつけられる。

ああ……マジ死ぬな。

『そんな簡単に死なないわよ』

気のせいかな。月野の声が聴こえた気がした。

『気のせいなんかじゃないわ』

なんだよ。テレパシーか。

『あら？ 意外にすんなり受け入れるのね』

もう、今さら地球が割れたって驚かぬえよ。きつと。

『そう。なら話が早いわ。圭くんは私と「交わった」ことで体  
内に変化が起きてるの。思い通りに身体が動かないのもそのせ  
いよ』

なあ。アレって結局なんだったんだ？

『アレはね。手っ取り早く言うなら「人体改造」よ』

改造ならもうされてるだろ。

『そうね。じゃあ「改造の改造」』

わけわかんね。

『別に言葉で理解しなくてもいいわ。とにかく、以前とは比べ  
物にならない「力」がキミには備わっているはずよ』

ハア？ だがおれはこの有様なわけだが？

『それは仕方ないわよ。だって圭くんは始めてレーシング・カ  
ーに乗り込んだ若葉マークの新米ドライバーみたいなものなん  
だから』

レーシング・カーか。「自転車」から随分格上げしたもんだ  
な。

『その喩え、私のじゃないけど？』

とにかく、どうしたらいい？

『それはキミ自身が掴むしかないわよ。最初の時と同じくね』

その前に、死ぬかもだぜ？

『だからそんなヤワじゃないって。ほら、来たわよ』

その一言が合図となって、おれの思考は月野とのやり取りから切り離された。

痛みを堪え、上半身をゆるゆると起こす。

目の前には二本の足。

それが急にフワリと浮いて、おれの顔面に迫る。

「圭くんよく見てっ！」

そんな声が頭上から降る中、おれは自身の体重を真後ろに預けた。

間一髪のところを、碓のドロップキックが掠めていく。

と、その時。

おれは、見てしまった。

碓の背後にある、異様な「突起物」を。

それが、変則的な打撃の正体でもあったわけだ。

なるほど、こりゃあ「よく見て」だな。

碓はキレイな放物線を描いて着地した。

背後のモノはもはや見えない。

それは、一言で表すなら「第三の足」だった。

しかも人間の足とは異なり、逆関節で、恐竜のそのような

凶太さがある。

先端は三本指に分かれ、鋭そうな爪が鈍く光っていた。

そんなモノが、碓の背中に、折り畳まれるようにひっそりと、

それでいて確実なりアリティを持って生え、その存在を主張していた。

おれはじつくりと、観察してみることにした。

碓は当初の冷たさを取り戻した眼でおれの方をじっと見、次の瞬間には何の予備動作もなく目の前に来ていた。

おれはわざと地面を無様に転がって、碓の動きを見極めようとした。

さつき微かだが、見えた。碓の背中の足が伸び、地面を蹴るのを。

予備動作は正確にはあったのだ。

おれの位置からは見えないだけで。

次に、攻撃を繰り出そうとする碓の足が振りかぶられるのが視界の端に映った。

蹴りか。

しかし、実際は違った。

豪快な風切り音と共におれの腹部を掠めたのは、あの第三の足だった。

足を振りかぶったのは、背中の足の初速を上げるための予備動作だったのだ。

碓はバック宙をする格好となり、綺麗に着地した。

おれはコイツの正体が段々と掴めてきたので、ほんの少しだけ余裕が出てきた。

地面をしばらく転がって、勢いを付けて起き上がる。

掴まなければ、レーシング・カー並みの「感覚の渦」を。しかし、これがまるで上手くないなかった。



そもそもあの時——元クラスメイトたちにぐるりと取り囲まれて死にそうになった時だつて、何故「感覚の渦」を呼び起こせたのかはまるで理屈では説明できない。

目の前の危機に立ち向かわねばという思いはあったが、半分以上は逃げたい気持ちの方が強かったし、結果、記憶の中には優柔不断なスイッチを押ししたような感覚のカスしか残っていない。

その後も度々呼び起こしたが、それも今となつては何故出来た芸当なのか、まるで見当が付かない。

ヤバイヤバイと焦れば焦るほど「感覚の渦」からは遠のいていく。

碓の変異に気付いたところで、思うように動けないのではまるで意味が無かった。

実際、先程から避け切れずに、どんどん被弾している。

死にそうになってのた打ち回っている。

『そんな簡単に死なないわよ』

と月野は言ったが、どうだか。

現におれの呼吸は乱れきり、血や汗や涙やらが逆り、足元はおぼつかず、誰がどう見たって立っているのがやつとの状態だ。

月野に一言毒づきたいが、その気力も無く、彼女はというと相も変わらず微笑を称えたままおれの方を

『私は信じて疑わないわ。キミの勝利を』

とても言いたげな眼差しで見ている。

おれと碓は、二メートルほどの距離を保って対峙していた。

彼、いや、ヤツは今まったく微動だにしない。

またノーモーションで背中の中のブツを使ってくるのだろう。

おれに對抗できる策は浮かばなかった。

仮に画期的なアイデアが生まれたとしても、現状では実行は難しいだろう。

ならばどうするかといえば、やはり無様に転げ回って、先端を掠めるように攻撃を回避し続けるしかない。

そしてどうにかして「感覚の渦」を、尻尾の先でもいいから再び捕らえなければ話にならない。

ああ、堂々巡りだな。

なんて嘆息し掛けた刹那、碓はまたもすぐ目の前に来ていた。

地面に伏せようと身体を投げ出すが、ヤツも馬鹿ではない。

すっかり学習されてしまい、片手で髪を掴まれた。

いのでどと苦痛に顔を歪め、振り払おうとするが、そうこう

している内に余った方の手で手首を掴まれ、不安定ながらも固定される形となつてしまった。

マズイと脂汗が浮かんだ時には、猛撃の火蓋は切つて落とされていた。

碓の背中に生えた第三の足が喰る。

それは器用に弧を描いて、おれの脇腹に爪を立てて直撃した。

ぞり——つという肉の削れるぞつとする音がし、鮮血の火花

が弾ける。

おれはまた吹き飛ばされるのを覚悟したが、そうはならなかった。

碓が固定した髪と手首を離さなかったからだ。

それは地面への激突以上に残酷な展開を予期させた。

第三の足は更に攻撃を加える。

今度は逆の脇腹へ——ばつっ

咄嗟に身体を捻ったのが幸いしてか肉は持っていけなかった。が、刃物で切られた時のような熱を局所的に感じた。

三発目はヤツの股の間から来た。

へそから上に爪が食い込み、ズタズタにされるのを目で確認し、本気で死を予感した。

その後、何発のエグイ攻撃を貰っただろうか——数える余裕も消え失せた頃、ふいに碓の拘束から開放され、念願になり掛けていた草地へ突っ込んだ。

しかしどうして放したのか。

碓の方へ目をやったおれは我が目を疑った。

ヤツの手には見覚えのある髪の毛が、頭皮の一部もろとも握られていたからだ。

激しい攻撃におれの頭の方が、耐え切れなくなったらしい。

自覚した途端、地獄のような痛みが頭と言わず全身を駆け巡り、思わず絶叫したおれの口から血の泡が零れ、意識が急激に遠退いていった。

### 3

気が付くと、おれは学校の裏山にいた。

目の前では月野が、月光の下で身を弾ませて踊っている。

おれの隣には、碓がいた。

彼もまた、おれと同じく月野のダンスに魅せられているようだ。

月野はおれたちの姿に気付き、優しく微笑んで手を差し伸べる。

おれたちはまるで吸い込まれるように彼女の手を取り、おれと碓も手を繋ぎ、輪になって踊った。

踊っている内に、輪は、回転を始めた。

おれたちは、誰からともなく笑い出した。

ハハハハ

ぐるぐるぐる

ハハハハ

ぐるぐるぐる

回って笑って回って笑った。

わらってまわってまわってわらった。

まわってわらってまわってわらって？

視界が、世界が、宇宙が回る。

笑い声が遠くに聴こえる。おれ自身も笑っているはずなのに。おれは。オレはどうなった？

おれは。オレは何処へ行った？

自意識が切り離されて、彼方へとフェードアウトしていったのか？

いつか、誰かが言っていた。

それが碓だったか、学校の教師か、テレビの学者先生かサブカルミュージシャンだったかは定かではない。

この世にある全てのモノは、小さく小さくとかく小さくしていくと、「クオーク」という物質となるのだ。

その「クオーク」の数は常に一定で、増えも減りもしない。

だからオレたちは生活していく中で、空中の漂う様々なモノの果ての物質を取り込み続けている。

その中には元ヒトの「クオーク」も含まれるだろう。

様々な「クオーク」を取り込んだオレたちは、誰でもあつて、誰でもないのだ。

そうだ。オレは「クオーク」になる。

どこまでも小さくなっていった、何処にでも行き、何にでもなれる。

ハハハハ愉快だ。

ヒドク気分がイイゾ！

ふと身体を見ると、そこにあったはずのオレの五体はもはや人間のカタチをしていなくなった。

オレの全身はどろどろに溶けて、クラッシュ・ゼリーみたいな半液体になっていた。

そんな状態のまま、オレは尚も回り続けていた。

笑い声は聴こえないが、気分はイイままだ。

月野と碓は、何処かへ消えてしまった。

それでもオレは当然のように回転を続ける。

地面を見ると、穴が開いているのに気付いた。

オレはこれからこの穴に吸い込まれていくのだと、何故だか確信した。

そして、その通りになった。

オレは地面に開いた穴へと、遠心力を保ったままズルズルと吸い込まれていった。

まるで自分がネジになった気分だった。

穴の中には無数の溝があり、ネジの螺旋とびたりと合うのだ。

そんな必然的な気分のまま、オレは吸い込まれていった。

この穴が何処へ通じるのかなんて気にもしない。

いや、本当は全部わかっているのかもしれない。

オレは、何処にでも行けて何にでもなれるのだから。

#### 4

薄目を開けると、奇妙な眩さの中にいた。

それはまるで赤ワインを水で割ったみたいなほんのりした赤色で。

それがまるで顔中にまとわりついているみたいに視界に張り

付いている。

オレは気分が悪くて頭を振った。

すると、驚くべき事実が気付いた。

どうやらこの赤色のモノはオレの全身を包んでいるらしいのだ。

首から下を見ても、まるで全身スーツのように、赤色の粘膜みたいなもので満たされている。

オレは一瞬、恐ろしくなった。が、頭部に衝撃を受けて我に返った。

赤色のベール越しに碓の顔が見える。

オレはコイツと戦っている最中だったのだ。

随分、長い夢を見ていた気がする。

目の前の碓がゆらりと動いた。

また、攻撃が来る。

オレは赤に覆われた両腕を上げた。

先程まで襲ってきた猛烈な痛みは、不思議なことに消えていた。

碓の背中に生えた第三の足が振るわれ、オレのガードを弾：

…かなかった。

いや、正しくは逆だ。

オレのガードに碓の第三の足が弾かれたのだ。

意外そうな顔をする碓に、一瞬のスキを見たオレは、咄嗟の判断で間合いに踏み込んだ。

そして、右の拳を叩き込む。

碓の顔面が大きくぶれて吹き飛び、地面に叩きつけられた。

オレは目を見張った。

ナンなのだこれは。

ふと殴った右手を見ると、赤色のゼリーみたいな不確かなモノが、そこだけ凝縮し、硬くなっているのに気付いた。

碓の攻撃を弾いたのも、同じカラクリらしい。

しかもこの時、この赤色の出所にも気が付いた。

この赤はオレのインプラント痕から流れ出ているモノのようだった。

その証拠に、インプラント痕はいつの間にかパツクリ口を開けている。

そこからドクドクと、粘性のある赤いゼリーが溢れ続けている。

しかし湧き出る量がオレの身体に纏っている量に影響与えることはないようだ。

その量は常に一定で、増えも減りもしないのだ。

アレ？ これはどこかで聴いたことがある。

どこでだったかは、思い出せない。

碓は、尚も埋まっている。

世界が遅い。いや、オレの思考するスピードが上がったのかもしれない。

身体も、驚くほど軽い。

深呼吸してみる。

うん。この赤の中でも息は普通に出来るらしい。

身体に刻まれた無数の傷も、いつの間にか血が出ない程度までには治癒し掛かっていた。

碓がようやく身を起こし、オレの方に向き直る。

その顔に、オレは違和感を覚えた。

下半分が「伸びて」いるような……。

ああ、そうか。

「顎」が外れているのだ。

自身の違和感に気が付いたのか、碓は両手でカチ上げて下がった下顎を乱暴に元に戻した。

そして軽く首を捻ると少しだけ笑って、背中足を器用に使

って地面を蹴ると、オレの目の前に移動した。

緑の双眸がヘッドライトの如き光の像を残す。

アレ？ いつの間にかオレはヤツの動きを追えていた。

碓は身体を振って第三の足でオレの身体を切り裂こうとする。

その過程も全て、見えていた。

オレは両腕と片足を一点に寄せて肘と膝をくっ付け亀みたいに丸くなり、碓の攻撃を弾き返した。

そして反動で体勢を崩しかけた碓の下顎に、全身で突き上げ

るようなアッパーカットを見舞った。

ヤツの身体は地面から大袈裟に浮き上がり、脱力したように尻から草むらに倒れ込んだ。

やった……。

オレは対等以上に闘っていることにひとまず安堵した。

ふと視線を上げると窓枠の月野が、満足そうな笑みを称えてオレを見ていた。

その顔は

『ようやく掴んだのね』

と暗に語っていた。

そして片手をゆっくりと自身の首へと移動させ、軽く難くように横へ払った。

『止めを刺せ！』と彼女は言うのだ。

それは、分かっていたことだった。

よし。

オレは転がったままの碓に追撃を加えようと向き直る。その時。

碓の緑色をした目が今まで見たこともないほど大きく見開かれた。

そして背中に生えた足がばつんと大きく音を立て、碓の全身を支える柱のように屹立した。

碓は全体重を第三の足に支えられ、まるで背中を貫かれてい

るような苦しげな格好になった。そのまま両手をゆっくりと広

げ、口が何やら言いたげにもごもご動いた。

「うぎよえああああおとおおおとおおおっ!!」

文字にするとマヌケだが、確かにヤツはそう叫んだ。

そしてその一言が合図であったように、屹立した第三の足がカニカボコみたいに細く裂けた。

碓の身体は重力に従って再び草むらへと落ち、無数の触手のように細かくなつた第三の足が全身を覆う。

しゆるしゆるびゅんびゅん音を立てるそれは、碓の絶叫を掻き消すような速さで蠢うごいてその姿を覆い隠した。

無機質で動物的な匂いのしないそれはまるで植物の蔦のようでもあり、オレは心底ぞつとしたのと碓が消え去ってしまう恐怖に駆られ、叫んだ。

『碓っっっ!!』

しかし自分の声はオレ自身にも分かるほどひどくぐもつており、この赤の外側へ通じたのかすら怪しかった。

しゆるしゆるびゅんびゅん

碓は自分の身体の一部だつたモノに取り込まれていった。

やがてその怪音も徐々に小さくなつてゆき、草むらに残つたのは黒光りする奇妙で歪な“球体”だつた。

オレが恐る恐る近づくと、碓だつた球体は弾けるように跳び上がり、空中でカタチを変えた。

そこに現れたのは、以前の彼の面影がカケラも無くなつた怪物。

黒光りする甲虫みたいにグロテスクな皮膚、更に全身を同色の甲冑のようなモノで覆っている。それは膝を抱え込めば球体に化けることが出来、丁度アルマジロの背中のような役割をす

るようだ。

そして、顔だ。

ああ、碓。そこにはもはやかつての美少年の面影すらない。

ミミズバレのように血管の浮いた皮膚はそこだけ青白さを残すが、両目にはメガネの代わりとでも言わんばかりに、野球ボールを二つに割つたようなサイズの赤い玉が眼窩にめり込むように嵌まつている。口には蛇腹ホースのような管状のモノが、かるうじて人間としての生存の証である呼吸を誇示するみたい

に啞えさせられている。

『いかり……』

「びゅーびゅーびゅーううううっ」

重量を感じさせる着地の後、ヤツの口からは呼吸とも呻きとも取れる音が漏れ聞こえていた。その音が一際大きくなり、ヤツは全身を大きく震わせた後、猛然とオレに向かって突進して来た。

着膨れしているみたいにも見えるヤツの異様な姿に一瞬、氣圧されたが、すぐさま迎撃体勢を取る。

“迎撃”と言ってもガードを上げるだけ。

どんな攻撃が来ても弾き返してやる。そんな気持ちで大地を踏みしめる両足に力を入れる。

ヤツが迫る。もう距離は二メートルもない。その時、オレは氣付くべきだつた。



く聴いて。さつきも言った通りキミの全身を覆う粘膜——プロブは戦況によって強度が変わる。でも、キミの意思でも強度は変化するの。具体的に言うとな硬くなるなら「軟らかく」もなるってこと』

やわらかく……？

『そう。そしてここからが重要よ。軟らかくなったプロブは形状を変化させることも出来るの。キミの意思でね。ほら、あのラブホテルでチーム・クラリオンの人達が鉄棒を変形させていたでしょう？ あんな具合よ。あとは理想の形になったプロブを再度硬質化すれば……もう分かるでしょう？』

オレに、この危機から脱出する武器を作れってワケか。今から。この状態で。

『そうよ。それしかないわ』  
妙に笑えてきて唇を歪めたオレは、そこで覚悟を決めた。

やってやる。こんな所で、死んでたまるか！

意識を集中させ、出来るだけ恐怖を片隅へ追いやると、右手を凝視する。

そこにまとわりついた赤い粘膜——プロブとかいったか。をとにかく軟らかくなるように念じる。すると、最初は何も起きなかったが、やがて表面が波打ち始めた。

どうやら軟質化には成功したらしい。

しかしここからどうするかだ。

おそらくチャンスは一度きり。

この攻撃が効かなければ、オレは腹をえぐられてのたうち回って死ぬだろう。

やるしかない。賭けるしかない。

今、この状況を打破する武器——それは。

細く、とにかく細く。

鋭く、ひたすら鋭利に。

想像する。

精製する。

形が定まったところですぐさま硬質化する。

出来た。

オレの右手の先には、三〇センチ前後の「錐状」で赤い毒虫の針のようなモノが、プロブと地続きになって形成されていた。

これを打ち下ろすべき相手は変わらずオレの腹周りに抱きついて、超音波の刃を振るっている。

腹の周りのプロブが随分薄くなったのを感じていたが、努めて精神を落ち着かせる。

狙うは、ヤツの甲冑と皮膚との「繋ぎ目」だ。

ヤツの頭はかろうじてオレの友人だった男の形状を保っている。

つまり人間だった頃の名残がすっかりと確認出来るのだ。  
オレのこの位置からは、ヤツの項うでもとの辺りが丸見えになってい



る。

首周りは甲冑で覆われているのだが、もう少し上——髪と首の堺は皮膚が露出してゐる。ここが繋ぎ目というわけだ。

但し、失敗は許されない。

ヤツも馬鹿ではないから、外せば狙いに気付くだろう。

一撃で仕留める必要がある。

オレは全神経を右手の先に集中させた。

全身を揺るがす振動と、舞うブロボの破片に気が行くのを必死に遮る。

これで、終わらせる。

オレは右手を振りかぶった。

それを渾身の力で振り下ろす刹那、今までの彼との想い出が走馬灯のように脳内を駆け巡ったが、それすら無視する。

『つてええええええええつ!!』

すべてを断ち切る絶叫と共に、閃光のような速さで打ち下ろされた右手の針は、ヤツの項に深々と突き刺さった。

死の絶叫は、なかった。

ヤツは、ただ静かに動きを止めた。

全身を揺さぶる振動もなくなり、腹に巻きついていて腕も、ダラリと下がった。

ズンという大袈裟な音と共に、碇貞美だったモノはすっかり草の刈り取られた裸の大地に突っ伏した。

オレは助かった安堵に腰を抜かしそうになりながらも、右手をヤツの項から抜き取った。

喉まで貫通していた硬質化した針には、赤黒いタール状の粘液がまとわりつき、糸を引いていた。

オレは腹回りのブロボが回復してくるのを実感しながら、月野の方を見上げ、ゆっくりと歩き出した。

歩みは緩やかな助走に転化し、オレは羽のような軽さで跳んだ。

そしてそのまま半ば押し倒すような格好で、窓際の月野に抱きついた。

ブロボ越しに、彼女の細い身体の内側に隠された、猫みたいにしなやかな弾力を感じながら、オレはキツク、月野を抱き締めた。

まるで、生きている感覚を取り戻そうとするかのように。

彼女の首筋に顔を埋めると、少し鈍くなった嗅覚がそれでも甘い香り探り当てる。

月野は少しだけ甘美な声を漏らし、両腕をオレの背中に回した。

オレ達はお互いに抱き合い、しばらくそのままだったが、不意に月野の身体が強張って、異様な気配を背後に感じた時にはもうすべてが遅かった。

振り向いたオレの視界に入ったのは、友人だった男の残骸。喉まで貫通した針のせいで呻き声すら漏れず、苦痛に歪めた

顔だけが浮遊するみたいに急激に迫ってきていた。

甲殻に覆われた身体を丸めようとしたらしいが、どうにも不完全で、鉄球に成りそこなつた鉄屑のような歪な姿だった。

しかし、オレは避けることが出来ない。

何故なら、目が――。

眼窩に嵌つた赤いガラス玉がさつき突つ伏した衝撃で割れ、

その奥の目が――。

覗く瞳が――緑色ではなく――紛れもなく――碓貞美の――。

全身に強い衝撃が走り、オレは必死で月野をかき抱いた。

彼女だけは、離れたくない。

彼女をただ、守りたかつた。

直後、オレの身体は窓辺から突き出されていた。

もの凄い勢いで山沿いの草地に突つ込んで、止まる。

オレは腕の中の月野の安否を確認しようとした、その時。

爆音と共に、巨大な光の柱がさつきまでオレが居た幽霊アパートに突き立っていた。

月野の部屋も、よじれた寝袋も、オレの上着も、そして、碓

貞美も一瞬で飲み込まれた。

轟々と輝きながら立ち昇る龍のような光に巻き込まれ、全て

が消えていった。

それはチーム・クラリオンをミニバンごと消滅させたものと

同じ、あの巨人が放つた光線の仕業だった。

オレは、見ていた。

すっかり無に帰したアパート跡地の遙か向こうに、ゆらゆらと蜃気楼のように立つ巨人の目の部分から、黒煙が立ち上るのを。

最後に見た碓の目は、以前の彼と同じ輝きを湛えていた。

彼はオレと月野を救おうとしたんだ。

勝手な解釈かもしれないが、そうとしか思えなかった。

オレは込み上げてくる嗚咽を抑えきれずに、その場に泣き崩れた。

身を覆うプロブを細かく揺らしながら、その涙を真紅の粘膜

に溶かしながら。

「圭くん」

月野の手が、赤い粘膜越しに背中を撫でた。

「悔しい？」

彼女はオレの顔を覗き込むようにしながら、妙に湿っぽい声

で言った。

「碓君は残念だったね。でも、ねえ、泣かないで。圭くん、泣

いてる暇なんてないよ？」

なんて言いながら月野はオレの背中を掌で叩く。

弛んだプロブが微かに波打った。

「悔しいなら、やろうよ。ヤルしかないよ？ 殺つちやおうよ。

キミなら出来るからさ」

「キミなら出来る」

その言葉が引つ掛かって、オレの涙は止まった。

「オレに……何が出来る？」

「何でも出来る。ハカイ出来るよ。アレだって、ね」

そう言って月野は陽炎の中の大巨人を指差した。

「オレにスイーパーが殺せるか？」

「キミ次第よ……殺りたい？」

「殺りたい」

「ホントに？」

「殺りたい」

「元に戻れない」かもしれないけども？」

その言葉の意味を深く考える前に、口が勝手に動いた。

「構わないっ！ 教えてくれ月野っ！ 何でもやるっ！ どう

にだってなつてやるっ！ 死んでもいいからヤツを……スイー

パーをぶつ殺させてくれっ!!」

オレの絶叫にも似た宣誓を月野は黙って聞いていた。

しかし、すぐに一瞬で身を翻しオレの目の前に降り立つ。

雑草が大きく揺れ、スカートがヒラリと舞う。

「よく言った」

ズブリ

彼女の艶かしい唇がそう動いた刹那、月野の人差し指は再び

のオレの左胸に突き刺さった。

プロブをすり抜け、鍵穴に鍵を差し込むみたいなさりげなさ

で体内に潜り込んだ彼女の一部分。

しかし最初の時のような快樂はなく、代わりに電気が走った

ような突き抜ける衝撃が全身を襲った。

「今からキミの『リミッター』を外すわ。もう後戻りは出来な

くなるけど、圭くんならきつとやり遂げられる」

優しい声音でそう言いながら、月野は差し込んだ右手の人差

し指を左右にねじる。その度にオレの全身に電気が流れた。

「忘れないでね。私は圭くんの傍にいる。それじゃ」

月野は指を抜き取ると同時に言った。

「いつてらっしゃい」

直後、オレの左胸に開いたインプラント痕から膨大な量のプ

ロブが溢れ出した。

それは射精というよりは放尿の感覚に近く、止まることのない

圧倒的な水圧にオレは思わず咆哮を上げた。

プロブは破れた水道管の如く止まる気配を見せず、オレは全

身を滝壺に漬けられたような錐揉みの状態となり、そのまま空

高く立ち昇っていった――。

Part VIII

エネミー・マインド

1

気が付くと、オレは赤い海の中にいた。

この海の中では不思議なことに呼吸が出来る。

緩慢ながら、手足も自由に動く。

平衡感覚も、保たれている。

目を瞑ると、月野の顔が鮮明に浮かんで来た。

まるで、瞼の裏に彼女がいるようで安心する。

目を開けると、オレの視線のやや上の高さに、シャープなラインの頭部があった。

それはあのスイーパーが送り込んだ巨人の顔だった。

どうやらオレと巨人人は、ほぼ同じ高さで対峙しているらしい。

でも、何故？

オレは自身の漂う海をゆっくりと眺め回した。

それはよく見ると先端が五方に枝分かれしており、人間の四肢と頭部に似たカタチを作っていることが分かった。

そうか、これはブロボなのだ。

この海は、オレ自身のインプラント痕から湧き出したあの赤い粘膜で構成されている。

しかし、不思議だ。

ブロボの量は常に一定のはずなのに。  
ああ、そうか。月野がやったんだ。

オレの傷痕に指を突っ込んで、リミッターを外した。

その結果がコレか。

『圭くんならきつとやり遂げられる』

そう言った月野の声が頭の中で反響する。

『忘れないでね。私は圭くんの傍にいる』

再度、目を閉じるとその言葉通り、月野はいた。

微笑んでいる。手を振っている。

まるで、恋人に会えた時みたいに。

深い安堵に包まれ、満足して目を開けると、眼前には巨人の拳があった。

ドオンッ

轟音が全身を揺らし、オレの身体は巨大なブロボと共に大きく傾いた。

痛みはないが、凄い威力だ。

慌てて体勢を立て直そうとするが、追い打ちの蹴りをボディに喰らいオレは尻餅を着いてしまった。

多くの建物がペーパークラフトのように容易くひしゃげる。

オレはウルトラマンの気持ち少し分かったような気がした。

下から見上げると、巨人人は全身に黒い鋼で出来たような太

いワイヤー状のモノを巻きつけていることが分かった。

全身を隈なく包むそのワイヤーは時折とこどこで弾けて

は、青白い火花を散らせている。  
弾けるどどこからともなく再度ワイヤーが巻きついて修正される。

その時に発せられる熱が、巨人の周りを蜃気楼のようにボヤけさせているのだ。

オレは何とか身を起こすが、今ひとつこの巨大化したプロボの扱いが上手くいかない。

動きが、ヒドく、鈍い。

起きたと同時に巨人の拳がまたも、頭部を捉える。

大きく弾かれて再度、尻餅。

街がクラッカーのような脆さで壊される。

しかしその大部分は、墜落したマザー・シップによって既に原型を留めていない。

オレは理不尽なデイズスターによって蹂躪された街並みを、更に引つ掻き回しているのに過ぎないのだ。

落書きの上から落書きを重ねても大差が無いように。

しかし、それでもなるべくならば、これ以上の破壊は見たくないし、したくもなかった。

くそつ、どうすりゃいい。

早く動こうとすればするほど、身体は言うことを利かない。

起きると巨人が距離を詰めており、打撃の餌食になる。

巨人の動きは、ラブホから見た時より俊敏に思えた。

何度か同じ展開を繰り返した末、不意に巨人が距離を取った。

オレの中で「ヤバイ」と警報が鳴っている。

直後、巨人の頭部が——とすれば新種のトカゲにも見え、全体のバランスで言えば小さ過ぎるソレの——二つの目に当たる部分が光る。

それはLEDにも似た青白い光で、瞬きながらどんどん大きくなっていく。

来る！ 来るぞ！ 光線だつ！

オレとの戯れに飽きてしまったのだろう。

巨人は戦いを終わらせる気だ。

オレは必死で全身を包むプロボに動けと命じた。

しかし、やはり上手くいかない。

もはやこれまでとキツク目を瞑った時、頭の中で月野の声が聞こえた。

『イメージしなさい。実際に動こうとするんじゃなくて、イメージよ。その身体は、もはやキミであってキミでない。圭くん  
の思念で動くロボットに乗ったとでも思っつて』

驚いたことにそのアドバイスは、月野がオレに与えてくれた中で、イチバンの確なものだった。

オレは瞬時に想像の中で身を躍らせた。

両腕を地面に着き、その反動で両足を空へ。

そのまま両腕の力のみで跳んで、巨人の頭を豪快に蹴り上げた。

バチイという強烈な静電気のような音がして、巨人は仰向け

に倒れる。

光線は宙へと放たれた。

着地したオレはブロボを操るコツを挿んだ喜びに打ち震えていた。

さあ、反撃開始だ!!

## 2

東京タワーの高さは、三百三十三メートル。

ウルトラマンは、四〇メートル。

ゴジラはシリーズ毎にバラつきがあつて、五〇〜百メートル。

じゃあこの巨人とブロボに覆われたオレは？

多分、百メートル前後だろう。

それがどうしたつてワケじゃないが、ひやくめーとるの身長なんてまるで現実的じゃない。

そのひやくめーとるが軽々と身を躍らせ、街をデストロイしながら取っ組み合いをしているのなら、尚更だ。

オレと巨人との実力は、拮抗していた。

オレがイメージの遅しきで三発の拳を巨人の小さな頭に叩き込むと、巨人は四発返してくる。ならオレは五発。そしてたら巨人は六発——そんな具合でお互い、一步も譲らない。

オレは打撃をもらう度、衝撃で全身がブロボの中で錐揉み状態になる。

普通ならゲロして然るべきだが、今のオレは痛覚同様、その感覚も麻痺しているらしい。

そんな中、オレがイチバンに気をつけているのは、やはり目から放たれる光線だ。

一度は窮地を脱したが、ラッキーは何度も続かない。

いくら痛みがないからといって、あの何でも消し去る怪光線を喰らえば無傷では済まないだろう。

ただし至近距離では巨人もあの光線は放てない。今は距離を取られることだけが恐ろしかった。

巨人が間合いを詰め、ゆるやかな速度で両腕を突き出す。

少し前からコイツは同じ動作を繰り返すようになっていた。

その動作が何を意味するのか首を傾げたくなるが、注意を怠るべきではない。

オレは突き出された腕をことごとく払い除け、ガラ空きの顔面やボディに打撃を見舞っていた。

しかし、それもどこまで効果があるのか分からない。

何せ巨人の外見上のダメージは皆無に等しかったのだから。

打撃を当てると巨人の全身を覆うワイヤーがところどころ弾けて、大きな青白い火花が散る。

だが、それだけ。

ワイヤーはすぐに補修されてしまい、大して意味はないように思えた。

打撃によるけながらも、巨人は尚もこちらに向かって来る。懲りずに両腕を突き出し——初動で見切ったオレは振り払うべく右腕を内から外へフルスイングする。

——しかし、巨人は途中でピタリと動きを止めた。目測を見誤ったオレの右腕——正しくは右腕を現したブロボが大きく宙で弧を描く。

つられた身体も腰をツイストさせた不安定な状態を強いられる。

ガラ空き——このバランスを欠いた体勢のまま、不覚にもオレは巨人に腹を晒して静止してしまった。

やられた！——。

何度も同じ動作をすることでこちらの思考をニブらせた。

慣れによる機械的な所作は隙を生み、それが致命傷にもなる。

この状況下では有り得ない「単調さ」をコイツは動作の繰り返しで作り出したのだ。

一瞬の後悔が頭を駆け抜ける刹那、巨人は努めて冷静に振り抜かれたオレの右腕のブロボを掴み、身を翻すと腰を跳ね上げ見事なまでの一本背負いを決めて見せた。

残された僅かなビルや電波塔を薙ぎ倒しながら、世界が一回転する。

巨人はそのまま腕を放さずにオレの上でぐるりと回って馬乗りになる。

腕のブロボは、器用にも小脇に挟んで極めている。

オレは必死になって暴れた。力任せでは上手く動けないのは知っていたが、一時の恐怖が冷静さを飲み込む。

巨人はそのまま拳を二、三発、頭部に見舞うと、暴れるオレの左腕を掴み、これまた器用にねじり込んで小脇に挟んだ右とまとめて極めてしまった。

これは何とも奇妙な状態になった。

オレは巨人にマウントを取られ、更に右腕と左腕のブロボをまとめて巨人の左脇に挟み込まれている。

これは手足が異様に細長い巨人の歪な体形が成せた技だった。いま巨人の左腕は脇を締める為に使えないが、右腕は自由だ。殴っても掴んでもいい。

オレは言い知れぬ恐怖と不安に襲われていた。

ナニカが起きる！

コイツはきつと無闇にこんなことはいしない。

ナニカをする！

オレはナニをされるんだ!!

こわいこわいこわいこわいこわいつつ!!

巨人は不意に右手をかざすと、拳を開いて掌をこちらに向けた。

やがて全身に振動が伝わる。

すぐにそれが巨人の右手から来る震えであると分かった。それはブブブブブと空気を揺する。

きつと周りは大地震だ。

その証拠にオレの真横の建物が崩れ、瓦礫が踊っている。やがて巨人の右の掌を包むワイヤーがばしばし音を立てて切れ始める。

その下から覗くのは、光線と同じ青白い色をした眩い光。

手は尚もブブブと震え、ワイヤーはばしばし切れる。

その度に光が**迸る**。

ものの一分も掛からずに、巨人の黒かった掌は、青白い光の塊になった。

歪な指の一本一本が視認できないほどに眩しく光っている。

光と同時に、オレは熱も感じていた。

熱い、氷河も溶けるほどの熱波がアノ右手から発せられている。

ヤバイぞ。

今後の展開が見えてきた。

オレは懸命にもがくが、執拗に足搔くが、とてもこの状況をひっくり返せない。

光の手はじりじりとオレに迫る。

オレの全身が納まっているのは巨大プロブの頭の少し下、首の辺りである。

じりじりと、頭部に当たるのっぺりとした赤に光の手が迫る。不燃ゴミを燃やしてしまった時のような、異臭も微かに漂ってきた。

よく見ると触れられる前から、頭部のプロブがじゅくじゅく音を立てて「蒸発」しているのだった。

無論、アノ手から発せられる熱によつてだろう。

これはイカン。

マジでヤバイ。

熱いのが来る。

語彙が貧困になるほどの焦燥感に心も焦げ付きそうになりながら、オレは何とか打開策をイメージしようと試みた。

しかし、まるでダメだった。

マイナスの要素が強すぎて、丸焼けのぐちゃぐちゃした塊しか浮かんでこない！

ゆっくりだった光の手が、そのままの速度で頭部を鷲掴みにする。

うぎゃああああああああつっ!!

ズブズブズブと雪に高温を宿した火搔き棒を突っ込んだように、巨人の右手が容易くオレのプロブ内に侵入して来た。

まるで身体の内側を撫でられるような嫌悪感に、オレは絶叫した。

耐え切れずに目を瞑る――。

そこには月野、つきの、ツキノの姿が――浮かんでほこなかつた。



代わりにオレの瞼の裏にいたのは山形圭吾——つまりオレ自身姿だった。

紺色のブレザー、瞳には緑の魔光を宿し、こつちを睨んでいる。

『オイ!』

瞼の裏の山形が叫んだ。

『オレに代わレッ! オマエじゃ無理ダツ!』

おれは呆気に取られながらも目が離せない。

『オマエはいつだって見てるだけだったろうガツ!? 裏山でも、学校の裏口でも、ラブホでもナツ! オマエはこの戦いを乗り切るにはココロが弱すぎル。分かるよナ? だったら早くオレに代わレッ!』

妙に金属質な声で、山形は捲くし立てる。

コイツの正体はもう一人のおれなのだ、と直感的に悟った。

裏山でオレンジ狩りを任せていた存在。

感覚の渦を掴んでからは、おれ自身と融合し、それでも戦闘時には顔を覗かせていた好戦的で残忍な別人格。

プロブに身を包んでからというもの、不思議とコイツは出て来なかった。

『オイ! 聞いているのかツ!? 死にたくなかったラ』

「断るツツツ」

おれは毅然とした声で言った。

いつの間にか瞼の裏にポツカリと空いた “どこでもない空間

” におれは移動していた。

目の前には、トランス状態のオレがいる。

『ほお、オマエにあの巨人が倒せるのか? 死にかけているくせニ……』

「ああ、そうだ。おれはいま最悪の状況にいる。でも、お前の助けはもういらぬい」

『あのヒカリの手でぐちやぐちやにされても同じことが言えるのか? このヘナチョコヤロウ』

「……分かったんだ。お前はおれじゃない。最後の決断をするのは、“オマエラ”じゃない。おれなんだ!」

射手谷たちチーム・クラリオンを死地に向かわせたのが、この宇宙からの意思なのかどうか、今となっては定かではない。

でも、碓が——碓貞美が最期におれに投げかけた視線は、宇宙電波の支配を脱したアイツ自身の瞳だった。

おれは、死ぬのならあんな目をして死にたいと、漠然とだが思っていた。

『そうか、だがナ。選ぶのはオレでもオマエでもない』

そう言つて山形が口の端を吊り上げると、空間の上部、丁度おれたち二人の真上に孔が空き、そこから巨大な白い “腕” が降りてきた。

その生つちろい腕を、そこから先の白魚のように繊細な指を、おれは知っていた。

「月、野?」

『決めるのはアノ人だ』

山形は否定も肯定もせずにそう言うのと、自信ありげに鼻を鳴らした。

『結果は目に見えているが、ナ』

おれは見ていた。

巨大な月野の腕が右へ左へ揺らめいて、指が別の生き物のように艶かしく動くのを。

月野の腕は迷っているような素振りを見せた。

おれか、ヤツか。

腕が揺れる。

山形の表情が少し曇る。その時。

一際大きく腕が揺れて、おれの目の前で一瞬、止まった。

ヤツが何かを叫び、腕の方へ駆け寄ろうとする。

しかしそれより速く、月野の腕はおれの全身を掌で包んで軽く握ると、そのままスルスルと元来た孔へと戻っていく。

下からは山形が口汚く罵るような声が聞こえるが、おれは月野の手が放つ、うっとりするような甘い匂いにやられてロクに聞き取ることが出来ない。

おれはスルスルと引き上げられ、選ばれた安堵感に浸る間もなく、意識が戻った。

### 3

目覚めたオレは、改めて絶体絶命の危機にあることを痛感した。

目の前に迫るのは、巨人のヒカル右手。

アノ厄介な代物はおれの頭部のプロブ内に侵入し、そのまま奥にまで侵攻して来ていた。

もうすぐ、おれ本体に届くだろう。

しかも巨人の光の手が触れたプロブは、その部分だけ赤黒く焼け爛れ、再生していなかった。

アノ超高熱の手に触れられれば、いくら無尽蔵に放出されるプロブを持ってしても壊死してしまうらしい。

しかし、この期に及んでおれはジタバタ足掻く気が微塵もないのだった。

ひどく、落ち着いている。

まるでまだ月野の掌の揺り籠の中にいるかのように。

おれは選ばれたのだ。

何も恐れることは無い。

そう半ば開き直ったような平静の境地で、打開策は自然と降るように閃いた。

このプロブは、おれの意志によって硬軟自在に切り替えることが出来る。

ならば。

おれは巨大な水溜りをイメージした。

溶けるッ！

ザアアアアアアアアアアア

おれがブロボに「溶ける」と念じた瞬間、滝の流れるような轟音と共に、おれの全身が埋まっていた巨大なブロボは跡形も無く消えてしまった。

いや、正確には純粹な「液体」と化したのだ。

これにはおれ自身が驚いたが、巨人も困惑を隠せない。順調に殺しかけていた対象が、いきなり消滅したのだから無理もないだろう。

巨人はまるで視力を失ったように、光の手で宙を搔いた。おれはすかさず次の行動に移る。

打開策は尚も、次から次へと脳内から湧いてくる。

液体と化したブロボは残った建物や瓦礫やマザー・シップの残骸を押し流し、道路を満たし、街を蹂躪じゅうりゃくしていく。

おれはその音を聞きながら懸命に集中し、イメージネーションの羽を広げた。

それは、ブロボの津波が巨人を襲うイメージだった。

なるべく大きな、目一杯の大津波を空想し、その思念のカケラが流れるブロボの端々にまで行き届くように工夫する。

すると、途端にブロボたちは逆流をはじめ、おれを中心にし

ながら竜巻のように跳ね上がった。

巨大な赤い昇り竜と化したブロボは空中で更に膨張し、三百メートルはあろうかという一度限りの大波になって、巨人に向かって降り注ぐ。

今だッ!!

おれはブロボが巨人に襲い掛かる刹那にイメージを翻した。その時、ブロボは「液体」ではなくなっていた。

弧を描く波のひとつひとつを、鋭利な「刃」に変化させたのだ。

そう、これはブロボの軟質化、硬質化の特徴を利用した応用ワザだった。

最も、研ぎ澄まされた刃物をイメージするのが思いのほか難しく、威力のほどは未知数だったが。

無数の刃と化したブロボが巨人に降り注ぐ——それはまるで獲物を噛み殺そうと大口を開けた、猛獣の姿に見えた。

ガチイイイイ

高速で回転する車輪に異物を噛ませたような耳の痛くなる音がして、今日イチパンの火花が散る。

それはまるで、花火の如く。

青白いスモークが一面を満たし、やがてゆつくりと晴れてゆ

く。

「屋気楼のようなシルエットがその中で踊っているが、それはそう見えるだけで実際、巨人の動く気配は無い。」

「殺った……のか？」

低く呟くおれは、それでも半信半疑のまま大量の湯気上げる巨大な物体の中に目を凝らした。

すると、光が。

屋気楼の中から、先程のスモークの比ではなく濃いLEDカラーの光がひとつ。

「やっぱり、な」

卑屈なセリフに唇が僅かに震え、やがて大袈裟で趣味の悪いモニュメントのような、巨人が姿を現す。

その身体には、おれの放った大量のプロブの刃が突き刺さっていた。

それは太いワイヤーを断ち切って、その下にまでめり込んでいた。

渾身の奇策は成功していた。

しかし、至極残念なことに、巨人の動きを止めるまでには、致命傷までには至っていない。

しかも、あの光。

場所は、頭部。

来る。

来るぞ！

光線だッ！

おれは絶望している暇のないことを悟った。残ったプロブを掻き集め、更に膨張させる。

しかし、間に合わない。

光が一瞬広がって、すぐに一本に収束される。

光線がおれの身体を飲み込む——その時。

おれは、誰かに抱き締められていた。

それは確かに「抱擁」と表すべき感覚で——まるでおれの本能から来る恐怖心を麻痺させようとするかのように、全身を包む。

おれは、見た。

おれを抱き締めるモノの正体を。

それは「無数の腕」だった。

客観的に見ればおぞましくもあるはずの光景だが、その時のおれには神々しく見えた。

何故ならその腕の持ち主は、全員おれの知っている人々だったからだ。

その腕は、クライメイトの一人であり——

その腕は、おれを育ててくれた両親であり——

その腕は、数年ぶりに再開した幼馴染みであり——

その腕は、何度も衝突した関西人であり——

その腕は、心を通わせた親友であった。

その腕たちは持ち主の姿こそ見えないものの、おれは確信を



持つてその存在を感じることが出来た。

そうか、これは「クオーク」だ。

どこにでも行けて何にでもなれる物質の果ての存在、その集合体なのだ。

おれは愛すべきクオークたちに抱き締められて瞬間的な安堵の中にいた。

この中では、時間の概念も異なるらしい。

光線の恐怖も彼方へ消えてしまったようだった。

みんな、みんな、ありがとう。

おれは心の底から、おれを包む無数のクオークに感謝した。

さあ、これからどうしよう。

やがて時間は元に戻るだろう。

光線に包まれたおれは消滅してしまうのだろうか？

分からない。

だからこそ、諦めちゃダメだ。

おれは手を伸ばした。

光の先へ、もっと先へ、もっともっと先へ、もっともっとも

っともっと……その先には。

月野がいた。

『忘れないでね。私は圭くんの傍にいる。』

#### 4

おれは、いつの間にか巨人の足元に立っていた。

いや、その表現は正確ではない。

おれの視点は、とても低いところにあった。

地面から一メートルも離れていないだろう。

視界の端々に、白くすらりとした女の子の足らしきモノが見え隠れしている。

これは、どういうワケだ？

おれは自分の意志で身体を動かそうとするが、上手くいかな

い。

不意におれの視点は急上昇し、目に飛び込んで来たのは、月

野真琴の顔だった。

『月野、おれ、どうなっちゃったんだ？』

声を出そうとするがこれも上手くいかない。まるで【口】が

無くなってしまったみたいだ。

『圭くん』

それでも月野はテレパシーで答えてくれた。

『残念だけど、あなたの肉体は無くなってしまったの。さつき

の光線が直撃したのよ』

『ああ、だから声が出ないのか。口はおろか顔も、手足も、

何も無くなっちゃったんだな』

『ゴメンね。助けてあげられなくて』



ふと、きづく。

なまあたた、かい、えきたいのなかに、いた。

“ここは、ど、こ、だ”

『……こえる？』

“だ、れ、だ”

『聞こえる？』

“き、こえる”

それ、は、きき、おぼえのある、こえ、だった。

『良かった。それじゃあ自分の名前、言える？』

“や……”

『やっ』

“ま……”

『やま？』

“や、ま、が、た、け、い、い、ご”

そうだ。おれは。やまがたけいごだ。

『よく出来ました』

こえは、まんぞくそうにいった。

『じゃあ、私の名前は？ 私は誰？』

“あんたは、だれだ？”

『声で分からない？』

おもいだそうとすると。こころのおくが。つんとするような

かんかくにおそわれる。

— それでも。なんとか。ことばにしよう。どりよくした。

“つ、き”

『つき？』

“つ、き、の、ま、こ、と”

『そうよ。その通り。私は月野真琴よ』

ああ、そうだ。思い出した。

おれは、山形圭吾は、レイキキュライの魔星から宇宙電波を浴びて、宇宙戦士となり、火星からの侵略者・オレンジと戦い、多くの犠牲を出しながらも生き抜いて、プロブを身に纏ってスパーの大巨人と死闘を繰り広げ、そして、死んで、クオークになって、それも、消えて……。

“月野。おれはどうして意識がある？ ここはどこなんだ？”

『キミがクオークになって、巨人を“一体”倒してから、もう

“二年”も経つの』

“二年……？ 教えてくれ、月野。あれから世界はどうなった？

宇宙からの脅威は取り除かれたんだろ？”

『……残念ながら、世界はひどい有様よ。圭くんや碓くんが

いた頃はほんの始まりに過ぎなかった』

月野は淡々と話し出した。今の世界を取り巻く状況を。

『あの後、スパーの操る巨人たちが次々と地球に降り立って。キミが最後の力を振り絞って倒した一体は、単なる先鋒だったのよ。ヤツらは世界各国に来襲し、甚大な被害をもたら



した。もちろん、生き残った宇宙戦士たちは必死の抗戦を繰り広げたけど、ヤツらの戦闘力は半端じゃなかった。多くの同志が死に、それでも残った僅かな戦士たちは地下に潜ってレジスタンスとして活動を続けている』

『月野も、そのレジスタンスの一員なのか？』

『そんなところね』

俄かには信じがたいハナシだったが、月野の言うことを疑うことは出来なかった。

おれは半ば盲目的に彼女の話す世界の崩壊を信じることにした。

それに、今もつとも聞きたいのは別の事だった。

『なあ、月野。ところでおれはどこにいるんだ？ 何も見えななし、液体みたいなモノに浸かっているんだが、身動きも上手く取れないみたいだ。教えてくれ。おれはどうなったんだ？』

『キミがいるところは“私の中”よ』

『は？ どういう意味だ？』

『そのままの意味よ。キミは私の“胎内”にいるの。もつと直接的に言うと、私はキミを“妊娠”しているのよ』

『ちよちよちよ、ちよつと待ってくれッ。おれは気が狂ってるのか？ トンデモナイ発言を聞いた気がしたんだが』

『キミはまだ正常よ。健康に育っていつているわ。私はお腹の中のキミに向かってテレパシーで会話しているの。ちなみに妊娠二十四ヶ月と二週目よ。通常の胎児の倍以上時間が掛かって

いるわね。でも、こうやってコミュニケーションが取れているんだから、出産は近いはずよ』

『ちよつと待って！ おかしいぞ！ どういうことだよ！』

『父親は誰だ！？』

『モチロン、圭くんよ』

『じゃなくて！ どうしてこうなった！？ アレか、月野のアパートでやったアレが原因か？ そうなのか？』

『違うわ。てゆうか、その質問もおかしいでしょう？ キミが聞きたいのは、どうして死んだはずの人間を胎内に宿し、会話まで出来ているのかってこと。違う？』

クスクス笑いながら言う彼女が、どうしようもない性悪女に思えた。

『分かっているなら早く言えよッ！』

『圭くんの最期の攻撃が巨人の頭部を打ち抜いた後、キミの自我は消えてしまったけど、まだほんの微量のブロボが残されていたの。その中にはまだキミのクオークも残っていた。』

私は、そのクオークを自分で“授精”したの。方法まで、聞きたい？』

『いや、いい。何となくは分かったが、そんな上手くいくものなのか？』

『私一人の力じゃないわ。レレイキュライの人たちが手伝ってくれた』

おれは、彼女の言う「レレイキュライ星人」のハナシだけは、

どこかで嘘なのではないかと疑っていた。すべては月野の狂言なのではないかと。だって、彼女は、あまりにも……何もかもが、尋常ではなかったから。

宇宙人よりもずっと……超常的だったから。

「おれは、赤ん坊として産まれるのか？」

『ええ、そうでしょうね。でも、普通の倍以上の成長スピードでキミは育つはず』

月野が言うからには、そうなのだろう。でも。

「でも、何のために？　　そうまでして、おれが生きることに何の意味がある？」

『キミは、人類の切り札に成り得る存在よ。私は、巨人と互角に渡り合うまっくんを見て、そう確信したの。だから、もう一度産まれて貰うわ。嬉しいでしょ？』

「ハイ、嬉しいです」

オレは、彼女が何者なのか知らない。それはこれから明かされないかもしれない。それでも、おれはまた彼女の近くにいられるという事実には、歓喜せずにはいられなかった。

例えそれが、地獄のような闘いの日々幕開けだとしても。

『あ、今蹴った』

月野はそう言って、変わらず鈴みたいな声音でコロコロと笑うのだった。

エネミー・マインドへ完

### JURA 30号発行に宛てて／牧野寺ケンタ

JURA 30号、おめでとうございます。この記念すべき区切りの号に自作を——とりわけ一応完結となる最終章を上梓することが叶い、感無量の想いです。

穴ぼこだらけの至らぬ愚作ではありますが、暇つぶしにでもなればこれ幸い……ウウム、どうも堅くていけねえなあ。僕ってばどうにも肩に力が入っちゃってら。

マジメ過ぎる文章は僕の作品にや合わないってのになあ。とにかく30号、スゴイですね。いっぺん積むか、並べてドミノでもしてみたくあります。これからも個性的な作品群の発表の場を在り続けて下さいね！

### エネマイの絵を描き終えて／まきしむ

トビラ絵、挿絵を担当させていただきました、まきしむです。さたけせいこさんの後を引き継ぎ描かせていただきましたが、最初から最後まで力不足をひしひしと感じながらの作業でした。

Freaksに続き、JURA 30号の表紙も描かせていただきました。エネマイも含めていい勉強になりました。

また機会があればよろしくお願いいたします。それでは！